

或いは川を前にして山を後にするのが勝てる陣だと云うが、敵により、勢いにより、時により条件が異なるので、全ての場合においてこのようだと定めることは難しい。多くは古人の言によって害を為す者がある。心は古人を師としながらも、その質を新たにせよと云うこともあれば、ただ一つのやり方に固執せず、我が心中に幾度も工夫を回らせて、いくつもの局面で手だてを新しくしようと思えば、自ら知謀（知恵のあるはかりごと）は出来るものである。全ての良將の質は言外にあるものであるから、時に到って負けないことは、兼ねてからの慣わしによる。大概このようなことは、戦法の個条に載せてあるので、言うに及ばない。或いは山を前にして川を後にするのは陣法の負ける理由であるとして古書に多く載せてあるけれども、これ又、一概に論じるべきではない。ただ、向き合う敵と味方の將軍の心持によって、勝地が却って死地となり、死地も生地となることがあるのが、常のならいである。先達の教えは皆、後世の初学者に対してその概要を知らせようとするものである。

時に到って臨機の権（一挙に勝敗を決する切り札）がなく、敵に応じて自らを自由自在に変化させることが出来なければ、それは「琴柱（ことじ）に膠（にかわ）する※一」に異ならない。そうであればこそ、この兵法の道を嗜んで軍旅（軍隊、軍勢）を心とする身においては、平素の何事もない時と言えども、その事を忘れることがないのである。鄧艾（とうがい※二）の跡を学び、古の武人達の言行を幅広く読み、事において奇策を出し、敵によって時々機転を致さねばならない。これを「未だ敵せずと雖（いえ）ども、先んじて人を制す」と云うのである。我が胆を天上に曝し、心に疑いがない時、初めて印可（師がその道に熟達した弟子に与える許可、お墨付き）に至るのである。

凡そ五十歩以内において相手を殺傷するのは、鉾戟（ほこげき）である。百歩以遠

から相手を殺傷するのは、弓矢である。この二つは、敵が近くして互いに死を諍（あ
らそ）うものである。千里以遠にあつても敵をして殺さずということが無いものは、
智謀慣習の方途である。さらには、智謀によらなければ、万事は成功しないものだ
と心得なければならぬ。

※一 琴柱に膠す（ことじにかわす） 〓 琴の琴柱を動かさないように膠で止めて
しまうと、調子を変えることができないところから、物事に拘って、臨機応変の
才がないこと。融通が利かないことの喩え。（出典「史記 藺相如伝」）

※二 鄧艾（とうがい） 〓 後漢末から三国時代、魏に仕えた軍人。主に蜀（蜀漢）
との戦線で功績を立てた。